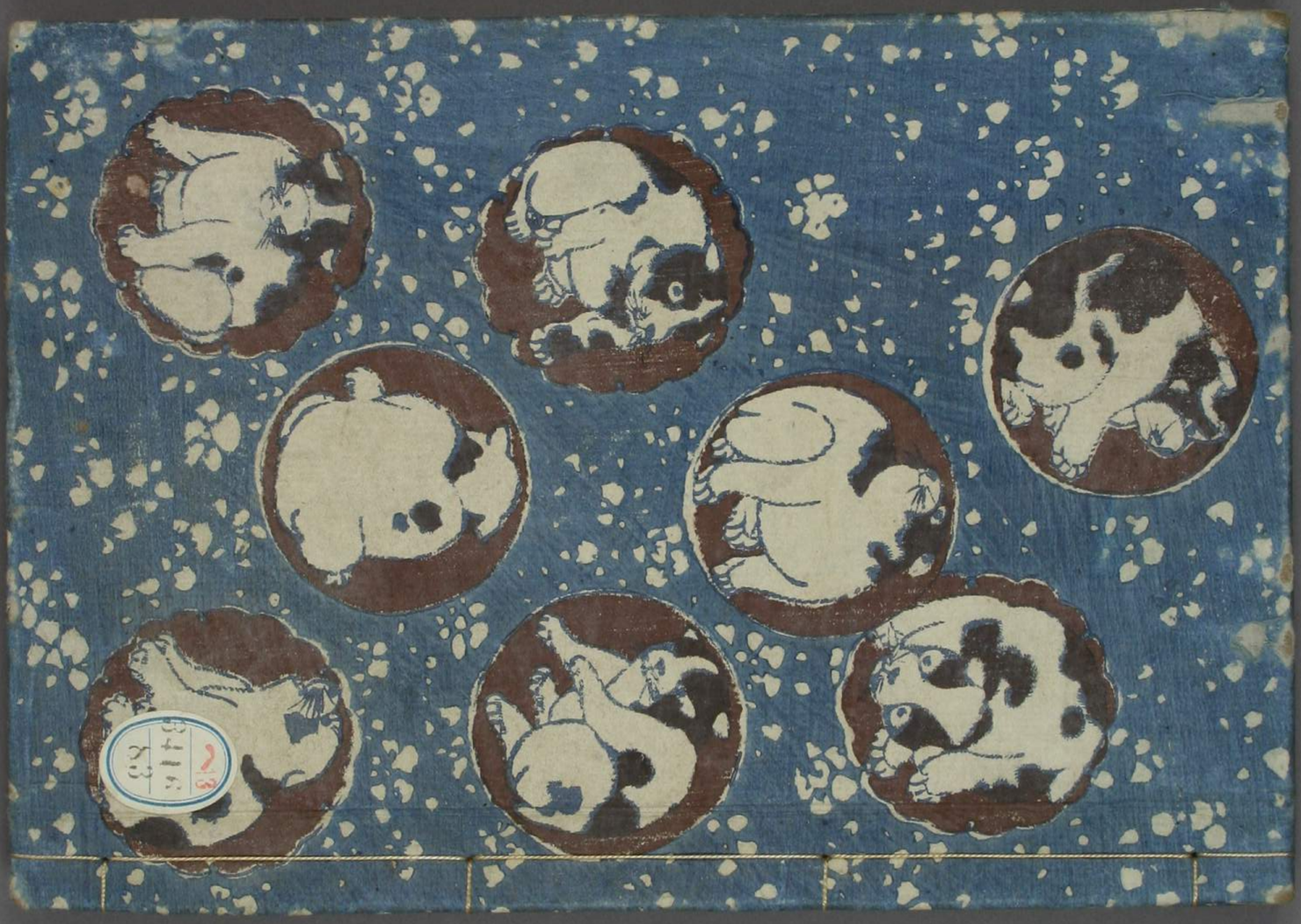


13
3414

拾五編

玉梅閣

三十四上

秋野勝義院

南總里見八犬傳第九輯巻之三十四

東都　曲亭主人編次

第百五十六回

貞行奥ふ託く稚子を留む
毛野明ゑ察して死囚を免さ

却説犬塚信乃犬田小文吾ハ早天ふ瀧田の城を出て、ひたすらふ路をのそぐく。稲村の城の宿所ふかへる来ら。隨即毛野道節莊介現八ふ瀧田ゆくあり〜事の首尾を詳ふ告知して老舘の御懇命犬江ゲ遅参を果敢るゑのふ御意の趣い慇々ん。又那密義ハ音音曳ゑ單節ゑふ別詰る。相鈍ぐくもんとふのを單如真い這軍役ふ漏されを恨ゑく且ら歎く。言果べくもあらざるを開も亦忠義の誠心ゆく。雄魂の致を所。叱り禁るふ由るけれバ只得其情願ふ信して一緒ふ来ゆ該ん。あの故ふ那稚子カ二尺八を。関くべを人あるぞ。是のゑ事の不便ん。大阪宜く計ん玉

○へと迭代ゐ耳々。一五一十を解示せば俱ふうち听く道節荘介現八も感嘆〳〵。音
音ハ素より勇婦ゑ老れども猶覚あるべ。曳る単節ハ弱女ゑ。姉妹共ゐ稗
子さへあるゐ。命危ゑ敵地の間者ゐ出ん。と勇むハヨヽ汐くて。是さへあるゐ妙真の心操
も亦愛さ。実ゐ那老女の。執送されて。親兵衛ゐ面正くもるゑ。犬阪今又
せん術あるや。と齊ゐく問へば。毛野ゐ答う。事の湊合ハ天ゑ命ゑ三個の婦女子ゐく
事足るべゑを。又妙真の加ゆるも。亦是自然の勢ひ。佞る義姑節婦。と廣ゑ江湖
上ゐ求るとも。一人ゐも汐くさかうんゐ三婦ゐく猶餘りあるハ。則是両館の御盛徳
実ゐ當家の洪福。佞れば妙真を相加へく。期ゐ莊まゐ共侶ゐ那敵所へ遣さん。ゐハ
不用意のゆるれば。まゐ館の御旨を請まゐぎ。ゐ。と答ふ。先千
代九ゐ對面させく。後ゐ禀上るとも。必や饒させめん。犬川ハ咱ちと俱ゐ早く
堀内許へ赴け。

曳る単節ゐ來ゆゐを俟く。両個の稗子カ二尺八をも各其母親ゐ推乃さ。推續
汐く背よゐ來ゆ。カ二尺八のゆハも堀内嫂ゐ告て憑まゐ左も右もせるべ。犬塚
犬田ハ疲労を息へく。妙真媼の一條を館ゐ咎へ上ゆゐ。日景短ゑ時候ゐるゐ。
卒ゆくべ。といそぎ。大家是を好と答く。莊介ハ毛野と俱ゐ臭壯衣ゐ伴當を
俱して堀内許赴ゑけり。然ば堀内父子の宿所ハ固より當城内ゐ在り。犬士ゐ
僑居所より。両三町ゐ過ざれば。毛野莊介ハ早く件の宿所ゐ。名簿を執
桜の若黨ゐ渡して。對面を請ゐ。貞行則閑室ゐ迎入れく。對面あけ。登
時莊介ゐ。曩裏ゐ芳翰をゆく。我毎七名ゐ憑ませゆ。逆徒千代九豊俊ゐ
低々の情願。とゆく。恩赦を願ゐ。まゐと。ゆ。一條を東荒川二郎ゐ告て同意の
上。隨即館ゐ。ゆえ上げまゐ。ゐ館の御内命ハ低々ゑ是ゐよゐて犬阪毛野ゐ敵を
劒ゐ。ゆべ。と。ゐ秘策これあり。ゐの美ハ毛野ゐ。ゆ。と。ゐ貞行頭を拾ぜ。ゑ。厚

紀造化ゆゑ咱等あの夏致仕してより。いまゞ半年を過ぎるゆ。老上病漸々ゆ身を逼
れ。行歩不便ゆゆゑ。養嗣貞住君命をもつて。今い上總の椎津ゆ在り既ゆ召さ
せられ。今日明日ゆ還る。思へ。それども那千代丸の情願い他を待つべき時宜なれば
已とを得ぬ各位を労する義ゆ。ゆゑ亟の言上面目あり。御意の趣謹さ。兼ねひ
那豊俊の恩赦の願ひ正ゆ他ゞ実情ゆ。只寛刑の仁恩を仰ぐの故ゆ今
番の軍旅ゆ従ふ。死をもつて報ひまらんと庶幾ふのみ。他事あるまじ。一旦御敵ゆ
対さう。那人ども。御仁政を感じまるとかくの如。況や咱等い当家相恩譜第の
臣。不能ゆして年居ヨヌ顕職を汚し。ゆ人として老るなり。朽惜き者いかゞ。両
管領の大兵十萬江を渡るべき風聲。居るゆ雪く本意なさよ。とのゝ毛野を
見るべそ。噫益も亡き老の諄言憶ぎ無礼を仕り。却て犬飯主の計畧い甚な
る徒を。厭れ。吟味くほうゆと。向れ。毛野い膝を找め。翁い当家中興の者

老人。秘策を。とく告ざるべ。晩生ゞ計る所者を。いべ箇様々々。尾い又箇様々々。
と豊俊ゆ詭らせ。敵ゆ降参を請ふべき事。其折豊俊ゞ敵の陣所へ遣ゆ密使
ゆ。妙真五日五日曳き車節。這老弱四個の婦女子。とのゝ。べき事。初い音音曳る
単節。とのゝ。這軍役ゆ充ゆ。せゆ妙真ゞ漏れを恨と切る誠心ゆ已とを。ゆ
志意味と。曳き単節ゞ児子力二郎尺八。初い姑且妙真ゆ憑を任用せ。他ゞ
宿所ゆ在せ。欲ゆ。妙真も亦役ゆ従へ。這心當の槌外れ。情由と他ゞ
べ。べ。の其崖略を解。所を言果て。又ゆ。却館の御内意い那豊俊の
情願の事既ゆ公儀の敬金定め。詭譎。と思召さ。十日十耳の視聴。
よくその情を探るゆ。若们藏人許ゆて。豊俊を糺問して。言愈実。べ。
毛野ゞ討果合ゆ用ふべ。とある。御上日かくの如。ゆ。件の義姑節婦。
豊俊を對面。異日の便宜ゆ。故ゆ那婦女子。道節と現八

が相伴ふく程ふく妻宅へ来宅へ去の義を禀演んとく我们両個先ふそ面談を請ひの兄と告る詞の玉かゝ淀兄辨ふ自約ふ都てそのゝ通を以て謹て答ふる御内意の言の趣義りの出千代九豊後を禁錮の義臣ゝ致仕退隱の後ハ多ゝ俗貞住管りまゝ。今ゝ図圖の外と饒さを那人館の御仁政を感服と軍功とそ那身の罪と償んと請ふ言の虚実ハ臣ゝ屢試く真実情ふを知れゝ遮莫料ゝ死ハ人の心之目今那身を牽出さゝん各宜く鞫問ゝ支。就く又一議あり。那妙真逗日音曳ゝ軍節ハ皆是忠義の本性ゆく或ハ其孫ふ代り或ハ其良人其親ゝふ代りそ渡さ生死の海を怕ぎ俱ふ這回の軍役ゝ用ひらゝと相欺くを誰ゝ感佩せざる。後世ゝの美談ゝん合れゝ見ハ公然ゝる老婦人と容顔美麗ゝ女弟兄ゝ。然ゝと今訟獄鞫断の席ゝく。俱ふ臂と連れさゝく未赦されざる罪人ふ對面させんハ倒ふ面正ゝくゝ

所ゝ。ゝ所詮件の婦女子ゝの異日敵地へ赴くまで鰥生宿所ふ留置て豊後ふ對面致さゝべ。又那両個の小児力二尺八ゝ其母親の軍役果るまで鰥生是を管りく荊妻拙女ふ養せん荊妻も拙女も穉児を愛る癖あり女児ハ近曽貞住ふ妻ゝ。ゝれゝらゝ子ゝ。ゝそのゝ他ゝ人の子ゝも都く穉ゝを見れゝ放ちゝる。本性ふハゝ他ゝ必欺ゝて衛ゝべ。ゝの義も心易ゝてゝと意表と具ふ説示せゝモ野いゝゝゝ荘介も事の便宜を欺ゝて貞ゝふ謝ゝてゝのゝ。御配慮の言の趣其理ふ當ゝゝゝゝ那四個の義姑即婦を一旦瀧田の宿所へ返ゝて異日敵地へ遣ゝ折ふ又召ゝゝゝゝ不便ゝゝゝ。然ゝと妻宅ふ留ゝゝれゝゝ是を知ふ者稀ふゝく且豊後の密出使ふ敵地へ趣く身の出入ふ其所をゝゝとゝゝ。況力二尺八を今政今愛ふ任用ゝて其母親ゝが役果ゝまで妻宅ふ措れんと一條ハ便宜の上の便宜ゝく特ふ安心仕ゝ。といゝ毛野も又云云と其歡

びを演る折から。堀内の若黨が。檐檻に来て。跪き。貞行に告るやう。犬山王犬飼主が。鄉高に来りて。次の間に在り。又郎君に上總より方便還りの由といふを貞行うちつゝて。开を待托しうけが。疾這方へといそぎ出て。応く退く若黨の案内にしたがく。徐々と這席に入る。両個の客。是則別人にあらず。犬山道節忠與と。犬飼現八信道。そゞ背に立つ。堀内雜魚太郎貞住。尚行壯衣の儘にして。躰く席末に坐を占れば。道節と現八。先貞行に向ひて。致仕の後も恙なきを祝して。又道節が。却晩生涯が今日の所役。婦人們の宰領。その所以。鄉高に姉真音音曳てひとよ。あやこ。多單節母子が。當城に来りければ。开が伜又轎子にうち乗せて。弟せて。宅へ来ぬ。あらう。尚外視を數ふるうれば。胡意背門より。舁入れさせしに。今政早く。少知りぬ。俱しる婦人們と稱児毎。則奥へ迎させて。管待さるゝ。少え。折今郎上總より。歸城あるゝに對面して。俱に翁を拝謁せんとて。次の間まで来たるに。翁は犬飼

犬川と密談の最中なれば。詞の腰を折らんと思ひて。猶豫して言の果るを俟たず。主客の問答其大畧を聞くに。貞行を。犬山王犬飼現八。剛才歸城のよしを告て。且毛野荘介に向ひて。豫少知りぬけん。椎津の城主真里谷信昭主い則館の通家に。亦那人年来強歓の崇なりけん。前月暴に身故りしに。子息いまだ幼弱にして。有司と諸士と。確執の生じたるの故に。在下館の仰を禀て。そゞく上總に赴く。前月より椎津の城内に在りて。件の確執を解諭して。一家の和睦を執扱ひし事。尤も篤く平ぐく。老黨若黨和順あつ。力を勤せ。心を同くして。幼主に忠を盡さんとて。則連署の拙言書を呈覧して。黨錮の罪を謝したるに。在下猶且その後を敬言捉て。罷歸まく。思ふ程に。大敵猛可ふ水陸より。推寄あべしと云風聲あり。其虚実いまだ詳らかにしあらず。両家老東荒川より。急遽脚の奉翰をもて。早く還るべしと下知せしまつる。

隨即椎津を立去りゝ。いそぎて歸路ゐ赴く程ゐ浦安牛助。登桐山八小森但一郎田稅力助も召れて各其管る所の廳南榎本舘山三人固城と次役の頭人ゐ讓り守らせゝ。連りゐ歸府をいそぐ。料ずも在下と路ゆく一緒ゐ。ゝ馬を駢べかるとそゞ伏隨即倶ゐ大城ゐ參上りゝ。悠と雪え上りゝゝ早く見參を饒されて。自他一樣ゐ舘ゐ拜見ゐ。なりぬ就中在下い猶且別室ゐ召さゝ。なまりゝ。犬阪主の密策ゐ依るべーとゐ。軍陣の御隊配と御口親詳ゐ仰示さゝゐ。実ゐ面目身ゐ餘る。歎びゐ。是ゐ由て各位の連日の軍議ゆゝ。配慮のゝーを査ーまるゐ。今日ハ亦千代九氏の一議ゐ。偶蔽屋ゐ光臨ゐ在下ゐ宿所ゐ在らざりけれ。いまゞ茶果の欵待ゐも及ざりし失敬海容あれゝ。と陳る口誼ゐ莊介い膝と找ゝ祝ーて。ゐゝ。開ゝ愛ゝ。椎津の家中の確執い亟ゐ解ゝ。ゐ。月を閲せゞーて。事理ーい和殿の

御ゐ栖。感心の外ゐ。と応ゝ。れ。毛野も亦貞任ゐ。向ひゝ。那拙策の趣ゐ既ゐ。舘の御直談ゆゝ。ゝ。ゐ。玉ゐ。開も易ゝ。且退ゝ。長途の疲労を。慰へゐ。と勧ゐ。貞任い唯々と応ゝ。亦復親ゐ。朝ひゝ。椎津の一義。御前の首尾も目今皆せゐが如ー。況犬阪主の秘策ゐ用ひゝ。ゐ。身の面目欽せゐゝ。とゐ。貞任ゐ。然ゐ。異日のゐ。今ひそゞ。ゐ。要事い這犬阪犬川の奉りゝ。来ま。ゐ。生拘の逆徒千代九豊俊を。鞫問の一義ゐ汝い這御旨を。鮠内垂西郎ゐ。ゐ。て。豊俊を書院ゐ。檻ゐ。檻ゐ。牽居させゐ。勿論汝い豊俊を管見ゐ宜く衣裳を改めゝ。其席末ゐ列るべー。とゐ。ゐ。毋ゐ貞任い応ゝ。四犬士ゐ。辭ーて。遽ーく退りけり。姑且ーく堀内の若黨ゐ。ゐ。四犬士ゐ。其ゐ。果子を薦めゐ。程ゐ。又現八ゐ。鄙ゐ。妙真立目立目ゐ。早く来ゐ。ける。折の便宜を。毛野と莊介ゐ。少く。鄙ゐ

和殿ぐらゐ歩くあり。一三百歩の遅速ぞ。他ぐらが早く来ぬまでそ。咱ぐらも既ぬあの次の間ぬく。主翁の計ひを吟くことを沼ろ。ーぬそれろ先ぬ今番達ぐ件の婦幼六名を奥へ喚とちめて。ぬ合さゐど一家児皆是一肚児ぞりる。忠と義と好情と外ぬいぐるくと参れば毛野と荘介も。主人の徳を稱賛そ。欽び涯りぞるけり。浩処ぬ又一個の若黨が檐檻ぬ走り来て。額を衝に主人ぬ朝ひく千代丸氏を御糾明の。准備宜くいと生ゐると貞紀うちぬ吟く。考らんぬい犬士達卒書院へと若黨と先ぬ立ーて案内ぬ考る。其身ハ徐ぬ四犬士の後ぬ跟ぬ。其ハ席ぬ造る毛野荘介ハ當役るれば端近く找ぬそ書院の中央ぬ居ゐ。雑魚太郎貞住も既ぬ公服ぬ更めて。貞紀と相對ぬて毛野荘介の左右ぬ在り。道節現八も検使品ぬく。間六尺許退ぬく。雙て其上坐ぬ居り。是より以下ハ前家老隷の青侍鮫内業四郎ハ袴の下と股まで袴り揚て腹

挿の刀を。瑞短ぬ跨く。檐檻の左の方ぬ在り。その他ハ究竟の走卒五六名。或ハ豊俊ぬ樹ぬる。青縄の端を含り。或ハ笞杖棹棒と挾ぬそ守りく檐檻の上と下ぬ在り。登時四犬士ハ晴を定りく。倶ぬ千代丸豊俊を見るぬ。その人年齢ぬ三十許。面の色白く。自異凡傑。徹りそ骨逞く。坐身高ぬ。月額の迹六七分延黒ぎれど。図圖ぬ久ーく瘵瘦もく。然ぐりの憔悴ぬ。書院の檐檻ぬ席萬一枚布ぬる。椎登されて跪居ぬ。嘗ぐ晉児堀内親子ぐ月屬側隠ぬる所以るべ。そぐ中ぬ単荘介ハ肚裏ぬ思ぬ。六稔已前我身武蔵の大塚ぞ。簸上宮六郎ぬ誣られく。寃屈の罪ぬ論ぬ。折丁田町進ぐ奸虐る。水火の責ぬ命危く。生ぬくぬりー身ハ恙ぬく。賜賢君ぬ仕まるそ。今日ハ人の罪戻を讞断の職役ぬ。那時我ハ御士の小厮。今の豊俊ハ一城の主。良賤素是同ーぬ。他ぬ叛逆我ハ忠と義其做を所。雲壌の差ぬるハ勿論。れども賢君上ぬ在ぜ。悪

けイハ
とうせう
さぶろう
とよとし
ぐんぺい

あとの
けの
さぶやう
堀内の書院ふ
智玉忠義信
と俱ゝ豊俊
を鞫問す

人も化して良善ふるの日あり。酷吏法を枉れば忠臣も誣られて罪なき罪ふ死す。
者あり。是ふ人の幸あると幸なるを儒は是を命とし老荘は是を自然とし佛は
是を因果とも以ふる哉と懐舊の臆念あるふ惆然たり。當下貞任豊俊と嘆
なりて。千代九氏這個二位は當家の賢臣犬阪毛野胤智。犬川荘介義任又
上坐なる犬山犬飼即是ふ這四個の人々館の御諚ふよりて。鬮問ふ爲べし。
具ふ荅稟しねと先そのころを汐さまれば毛野はそ儘端然と豊俊ふうら向して千
代九氏衢ふ當る管見堀内父子ふ就て請稟あり。情願の言の趣はいて差池あら
ざるやと向れて豊俊頭を抬げて然は我性の愚なる曩ふは素藤ゞ奸詐を悟
らず。他と魚水の交りを做すゞ遂ふ慮外の御敵と做るあらん。墻壁隆車ふ
勝うるはれば城陷り士卒離散して身は是楚囚の今まで。仁君死刑を言ぶの
ぞ且當る管見堀内吏の長者なる。禁獄の守り忽諸なるも反て籠中の禽を

養ふふ只惻隱をのくせざるとなり。是ふよりて餓を凍を坐して食ひ肘を枕ふて
睡るの久あるまで身ふ杖笞の呵責あるべを知ざるは則是君臣一致の仁心
なく。仰げば高き德澤ふ羞て報恩を思へども由なし。願ふ所は這回の軍役ふ加へ
て死をもて罪を償ふ欲するの外はなく亮察あれかと啣言ぶ。陳
ずるを。毛野は少く黙頭て好そその美あるうちと応て側を見るの。犬川目
今少く如し。恩赦勿論なるべを狀と問ふ荘介応はせず。沈吟ぶるを程ふ道
節は悚難て。佶と現八ふ目を注せて。共侶ふ膝を找めて。茲よりは犬阪今其召
囚徒豊俊の陳ずるは堀内吏の愬ふて我少く所と增減なし。只然ぞ免
されるべ又拷問ふ及ぶまじ。這ふ再四の問荅あり。一言ふて信容まて。是ふ千
慮の一失狀犬飼什麼と見れば現八然と領ずて和殿の小心愚も同意
言と心の表裏あるを亟ふ知るべもあるべ再三數四詰り問ず。黄金白銀とをさ

るも錫欽鉛欽骨版の知れん犬阪疎忽ふあらぎやと詰れば毛野は含笑て其頭の小心極めより我才子路ふあらぎれば片言以訟を定むべうは思ひども孟子の一書ふ云るとあり人の人ふめふ時言の虚実を知まく欲せば先其人の瞳子を見よ瞳子偽々るふとえい偽々えと教えう因て我今千代九氏と問答の折其瞳子を相く考るふ孟子の教果して違はぎえの人の願ひ実情ゆゑ虚言るゐを知るふ足れり今更疑ふとうへと解まく道節現八も其聰察ふ感佩して又論まる由もゐ莊介これをうち笑て犬阪の鑒定寔ふ尓る情るえ者は其辭をよく盡さとを込ぎ千代九氏の云所始終符節を合まる如く増減るえは是其情の一筋るあり照驗之犬阪は早く自得して相學さへ凡庸るれば今相る所逸早くえ術既ふかくの如し実ふ敬服々々と稱く同説の外るければ負ふも負任も四犬迭ふ善ふ與まく已ふ勝ると思ぎ嫌ふぎ。俱ふ公ふて偏頗るえは當家の寶えの上あらど

と感ずて憑しく思ひけり。偽而毛野は堀内親子ふふ安う各目今改めひし如く千代九氏の陳まる所其実情ふ疑ひるし館へえの美を稟上げ罪免さるべえ者るれば權且縲絏を解饒してえの処へ召升さん咱名尚問ふべえゆゑ示まべえるあり一雲妻時士卒を退けめとのふ負任まろ仍く檻檻ふ侍る艶内兼四郎を近つけく事偽々と分れい兼四郎は応をまろ。豊俊の賈縄をゆ早く解ふく坐席の方へ卒とまろふ推找せく却走卒名と俱ふ外面へ退りけり。當下毛野は豊俊と身邊近く招よゆて聲を悄ゆく談まるう千代九氏和殿館の御仁政を感謝して願ふ少如く今番の戰ひふ従ふとを饒されえ戰功えゆそ其身の罪を償まく欲まる誠心寔ふ時を仍くうとのべ。まれども弓箭刀剣は僅ふ一両個の敵を殪ものを焉ゆでよく大功を成さんや。和殿一箇の勇を負まで我計ふ従んとうぶ。悄地ふ肺肝を示もべ。和殿の心いふそやと問へば豊俊額

つ傷に謝して。諸彦慈愛の執成ふよりて。喪ふべき我首を既ふ續うてのこるぞ。猶
後栄の頼みあるふ縱水火の中へとも。いとゆく推辭ぶ何事まれ美ん願ふ早
く教へよと答る詞勇あり。天ふ拯言ひ地ふ拯言ふ誠心氣色ふ見れば道節莊
介現八ともうへ貞行も貞住も現奬善の域ふ入りける。その人成を事あるべ。と思へ
頻感嘆れり。姑且して毛野い又聲を低めく豊俊ふ示まう。千代丸氏我這方
すそのく。大敵を劒ふせまく欲する。計畧を誨ん欲まく。と耳披よまく。耳ぶ示
まと半晌許。逆毛野ぶ計る所。那八百八人を始めく。豊俊ふ伴せて。敵へ降
参の事の趣。其時豊俊ぶ。敵へ遣を密使ふ。音音ぶ老弱四個の婦人を。
用ふべしとうれば既ふ他ぶを召よせく。只今奥ふ在るられ先豊俊と面善児ふ
ゐさまく欲する前後の用心。送ゐくまうをふきれば豊俊欲び意外ふ出て。忻然
として答ふるやう。示教義りいと。今情願を容られく。軍旅ふ從ふのこるべ。然

る大役ふ充らるへ面目ふの上やいべ。死ふの身ふ敵の士卒と俱ふ。燬ふ燔れ海ふ淪
むとも機ふ臨ふ変ふ応じて必做ふ事あるべ。ふの義ふ心易ゐべ。我身不肖ふ
いへとも。父祖相伝の遺領を羨て。一郡一城の主ゐりしふ恩顧の士卒ゐるふあるぞ。
然れとも其忠義の志氣あるく且恥を知る者ふかの折戰死して。餘子ゐるふ
べ。その餘ふ城を二無命を免れる。兵毎ふ往方を索ふ召聚へ。今番の
役ふ從ふるとも事ふ益有るかうん恥くふと陪話るを現八ちゐうく。そを左まれ右も
あれ在処もあらぬ其残黨ふを求ひて用ふ時宜ふあらば。和殿の敵地ふ赴く折。
從ふる遅兵ふを犬阪ぶ必准備あうん。といへば道節然ふと応く更ふ莊介ふ向ひて
いふやう。既ふ館の御内意あれば今日よりして千代丸氏の禁獄を饒もともけうふ
ゐるるぞう。今故もるく囚固より出きば衆人必疑ふべ。とふを莊介守まむ。其頭ふ
犬阪脱落あうんや。犬阪什麼と請向へ。毛野い笑々默頭ふ。賢兄達の小心い

我思ふ所と相同じ堀内叟。貞住主。あの美をとくまろ給ひし。又千代九氏を
囹圄ふ返して。只守護を固くせ。近日赦免あるべけれがとく由断の為体ゆく
日を過さん。あの人囹圄を破り脱れ去りく。敵ふ降参もとふふ前後の進退吻合
せん敵と闘矢の日定くが那地ふ造るふ。又術あり。そをの折ふ談ぜ。それ先立音音曳
四個の婦人を。千代九氏よ對面させく。異日の便宜ふ事整づ。早く囹圄へ返せ
べ。とふふ堀内親子ゐろ給る。貞住みづからあきこ。妙真音立曳ふ單
丸即を。推立てゐく来ふけれが四犬士則這義姑節婦ふ豊俊を對面させ。
密談既ふ果しが。貞紂と貞住い先四個の婦人们を早く奥へ退けそ。却葉
四郎们を喚聚へ又豊俊ふ腰縄被けく。牽せく囹圄へ返しけり。

作者少選。秃筆を閣く。且一服と煙を吹く。漫ふ獨語て道らく。本輯前
前回ろりくあふ至るまく。密談商量の段甚ヨヌろ。皆是後回の襯染ふ

ましばらくすると。そをぞりけり大凡其趣ゆく。看官ゐべく歡ぶべ段い。誰も綴まく
欲せべ。ゐ為ふ花もゐ平話を載く。丁寧反覆して。ゆく綴做せる。則
作者の苦界と。然が是ゐの苦界を省らく。善綴り果さん事い。彼維賢李
笠翁の大筆ゐも。必病る所ゐ。こん狹水滸傳を除くの外。吾其畫せるとヨヌ
く見ぜ。本傳い水滸傳ろヨヌ者五十回。水滸後傳を加えて。尚十回餘り
あり。俗ふ云下みの長談義ゐべ。蓋小道といへども。必見ゐべ者ゐ。君子い泥
んことを怕る。鳥滸枝ふ。鳥滸の用心ゐ。看官作者の苦界を知ぜ。辛ゐも
苦ゐも雑ぜて。五味塩梅ゐ意味ゐ。是鳥滸人の用心ゐぜや。

第百五十七回

上總の民孝義再恩を亶く
安房侯仁心軍令を定む

あの日犬阪毛野。犬川荘介。犬山道節。犬飼現八ゐ。堀内親子の宿所へ

千代丸豊俊と密議果て〳〵。僑居所ゆかりの者。隨便犬塚信乃と犬田小文吾ゆ件の事の趣を送もるく告知せるゆ信乃小文吾ハ力二尺八の事の便宜を欽びく。這里の館ゆ妙真の事ゆ情由を。詳ゆ申え上げ〳〵ゆ館の御感淺〳〵ぶ。その後とも事毎ゆ我旨を請ふ要る〳〵。毛野ゆと共ゆ先相計ひて。後ゆ告よと宜ひゆ豊俊のゆも分るゝんと生るを毛野いちゆ。遽莫密議も亦君命ゆ依るゆ疾稟上んとそ。莊介と共侶ゆ遽〳〵君所へまゐりて。則義成主ゆ貞約の計ひ豊俊の美服通〳〵あの日の事の便宜を。悄地ゆ申え上あらべ。義成感心大々ゆ〳〵豊俊のゆあの上も。毛野ゆ方すゆ任るとく。其挿紀を賞せ〳〵。左右ゆる程ゆ十一月ハ盡僅ゆ〳〵時候。豫武藏ゆ在りける里見の間諜児ゆ。夜毎ゆ快船ゆ乘り走〳〵つかゆ來て。敵地の動靜を注進ゆ。然ば扇谷定正の五十子の城ゆ。加勢の諸侯漸々ゆ着到の申えあり。

その〳〵其隊々々の大將ハ。山内顕定父子を首ゆく。滸我の成氏石濱の千葉自胤白井の長尾景春越後の旅の大刀自及両管領扇谷山内麾下の諸城主大石憲重其子憲儀白石重勝。小幡東良ゆど。枚挙ゆ遑あ〳〵ぬ。その他ゆ。武藏相模の野武士毎ゆ。招ざるゆ聚ひ來て。両管領の隊ゆ屬く者。壁言ゆ群る蝗の如〳〵。あの内中。山内顕定父子ハ本月晦ゆ勢汰あ〳〵十二月朔ゆ鎌倉ゆ出陣〳〵て。二日三日の比五十子の城ゆ入るべ〳〵と。ゆ風聲あり。又相模の三浦義同甲斐の武田信昌ハ北條長氏の壓ゆ。彼子息彼親族を大將ゆて。加勢あ〳〵と定めゆる。あゆ義同の嫡男。三浦暴二郎ハ。猶勇ゆ〳〵て。膂力百鈞を挙ゆ足れり。然れども頃日寒熱の恙あり。病臥ゆ〳〵ていまゞ出來ぬ。又武田信昌ハ。親族の中誰を軍代ゆ。ゆ〳〵ぬ。その美いまゞ詳ゆ〳〵ぬ。單内管領持資入道道灌ハ。年來扇谷殿の。乱政を諫難ゆ。糟谷の館ゆ屏居あ〳〵れば。

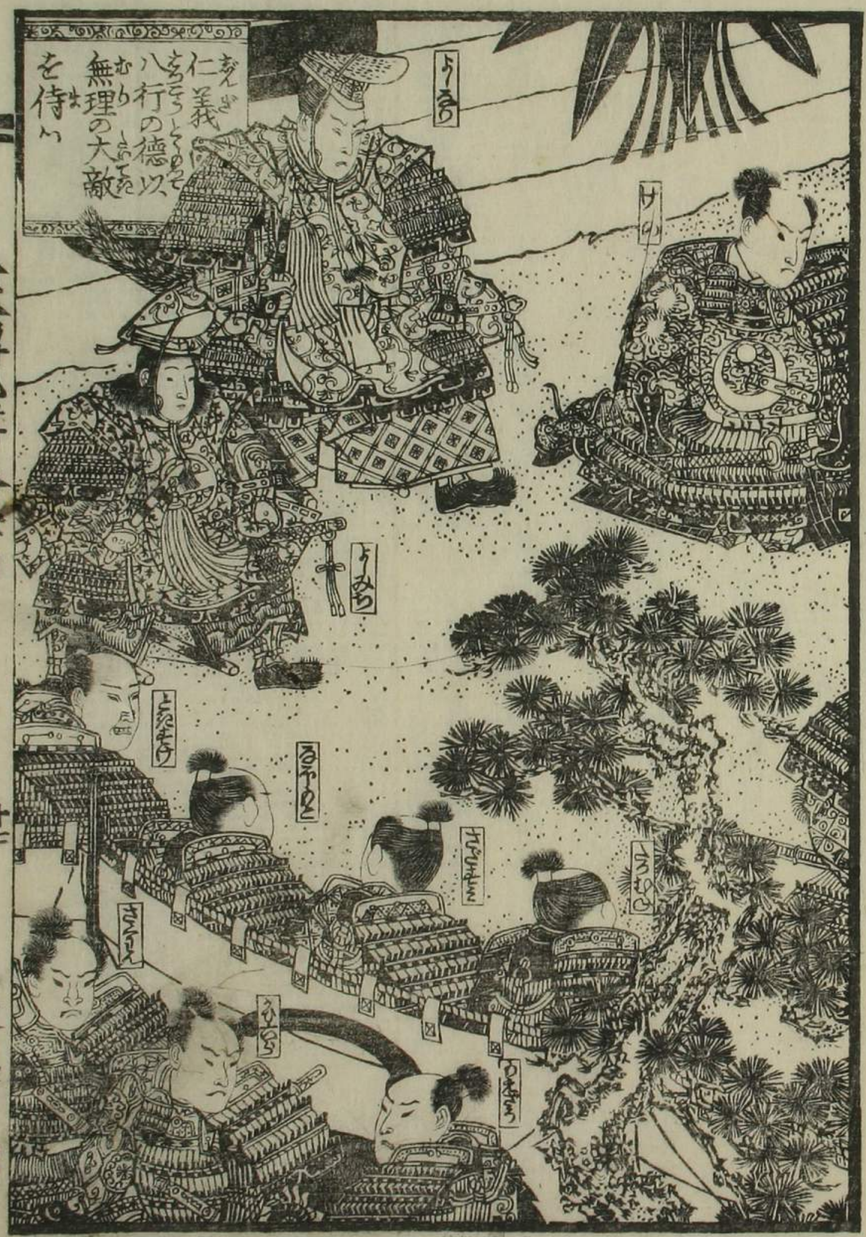
今番の役ふ従つ子息薪六郎助友をりく。其催促ふ充んとの事助友もいまだ未ぎ。是等の遅凝不参の諸将を除くとも其勢既ふ十萬餘騎陸い下總の行德囲府臺水路い徑ふ洲崎へ渡して安房上總を略まくまと云その言今日ハ昨日より細くて疑ふべくもあらぬれども義成主い隊より思ひ込む居るを敢誤ぐ氣色を。折ら安房上總下總る自家の軍兵漸々ふ稲村の城へ着到ある者三萬五六千ふ做りて。あゆも士卒の隊配して。水陸の備を立んとく。十一月二十八日ふ當囲洲崎明神の社頭を本陣として士卒を送るく聚合ら。揔大將里見安房守兼上總介源義成朝臣い薄金の鎧錦繡の戰袍ふ精好の奴袴を張せく。大月形の大刀ふ皐皮の尻鞘被けるを佩做て。ふふ純金の麾を採く。発児ふ尻を掛け。幔幕の下金屏建て居。本陣の中央ふあり。次い嫡男。里見御曹司義通小櫻紋の鎧戰袍ふ。精好の奴袴。猩猩緋の草沓穿て。牽祖の名刀ふ。豹皮の尻鞘ある佩做て。尚童年の副將ふれども。威風宛父祖ふ似く。発児ふ尻を掛る。相貌猛々しく愛敬あり。最美しくふそなはる。這両大將の左右両側ふ華裃布せく。軍師犬阪毛野金碗宿祢道智。水陸の防御使犬塚信乃金碗宿祢成孝。犬山道節金碗宿祢忠與。犬川荘介金碗宿祢義任。犬田小文吾金碗宿祢悌順。犬飼現八金碗宿祢信道。鎧の紙糸。八彩るを。茲ふ五色と間色あるのを。戰袍以下の武具ふ各その色を分てども。心い同じ忠義の壯雄信乃い村雨の大刀。桐一文字の匕首。荘介い雪絲の両刀を帯て。然ば毛野道節現八小文吾も。或い家傳。或い感得の名刀を帯ざる者なく。札ら兜鉢冑。是星の頭鎧。臂縛脛。衣ふ至るまで。あの日を晴と打扮る。武勇胆畧一様なるを。具ふ名狀しがたく。皆一列ふ侍坐をる。其左の一側ふ當職の冢

宰。東六郎辰相。荒川兵庫助清澄。兵頭杉倉武者助直元。堀内雑魚太郎貞任。上總の館山の城の頭人小森但一郎高宗。田税力助逸友。上總の廳南櫃本両城の頭人浦安牛助友勝。登桐山八郎良千弟。武具就も皇光やうゆゑ。夸くあゆふ星列。その他致仕の老黨杉倉木曽介氏元。堀内藏人貞紀。小森衛門篤宗。浦安兵馬乗勝等の衰老出仕ふ堪ざれども。當家の安危ふの時ゑうんふ坐して食ひ温ふ衣く。屏居く身の幸えと思ひ。人の道ゑうんや。縱杖ふ椎ゑうとも。御陣ふ従ひまゑうんとく。各再勤の願書をゑく。齊一請禀ゑーかども。美義成是を許しゆゑも。其父老く。其子易ゑふ。則天の下の通義ゑ。老ゑ八既ふ功成りて。身退ゑふゑゑ。故ふ今直元貞任。友勝高宗逸友ゑ。或ハ父ふ嗣ゑ。或ハ小父ふ代りく。我ふ往へく。皆精勤の竹えゑ。然ゑを老ゑをさへ軍陣ふ駈入れゑ。當家ふハ人ゑ

やとく。他郷の人ふ笑れん。あの義決して無用ゑ。ゑゑ八今ゑふ老ゑを願ひ稱ゑを尉ゑゑ。ゑゑふべ。ふの時各安然と屏居く日を過ゑを。慨しく思ひゑる。瀧田へ參りく。老館の御陪堂ふ做りく。慰めまゑうね。然ゑも欲びゆふべ。瀧田といへとも敵を待ゑ。龍城ふゑゑ。ゑゑゑゑ。隨即瀧田の老侯ふふの趣を告ゆふ。義実主欲び感じて。件の四個の老毎を召せと連りゑりければ。氏元貞紀。篤宗乗勝等ハ。各ふの懇命を義りく。倶ふ感涙の找むを覚ゑ。現賢君の御計ひ孝ゆく且慈悲ゑ。従ひまゑうぶゑむやとく。倶ふ瀧田ふ赴ゑく。權且龍城ゑゑけふ。ゑゑ是昨日のゆゑふ。今又一個の老実児あり。是足則別人ゑゑゑ。是裏ふ上甘利墨之助弘世の為ふ主僕安身の莊園を與へられゑふ。天津九二四郎貞明也。精悍ゑく武具して。其莊園の莊客二十名許ふ鮫甲を擐せく卒

き事。則東荒川両家老に就て。請稟まつり。大敵封域に莊むとなん。其時
えある故に。今日よりあく敵を逆る。御隊配を定めゆふとるん。人倫に知
ア。いくぶ萬一の報恩に仕へまつらん為にのこ推参仕りける。主ゆくい墨之
助弘世の両館の御仁慈ゆく。絶る家を嗣ぐ慶る祀を奥もとを汲ていへ
ども那身低弱ヨヌ病ゆく。軍旅に従ひなりかさるあの故に臣等弘世の名代
とーて。死をあく洪恩に報ひまつらまく欲も願ふい神餘金碗に由縁あ所犬
士の隊に屬させのくとふ情願老実也けれい義成則九三四郎を召近つ
けく。みづから諭しゆふ。汝の情願所以るぬにあねど人各其主の為ゆも
汝い他を見ゆくるぐ墨之助にらく仕へく。らく那身を終らも素のをゆく職分に
倣もへぬ者と然れど今。這軍役に従つもとも我に仕る八犬士等既に赦許を
蒙りく。皆金碗宿祢れば墨之助に代るよ足まち。夫孝子を其親の

為に巖墻の下に立ぬ忠臣い其君の與に鄉黨の戰を助けも。汝の志い賞
もべ。其願ひい許しかさり。速に退るべしと言叮寧に制めゆべ九三四郎い
感涙の拭むを覚ぬ額を働く。尊命に悖りなるべ罪免まちくいへども死
より重ぬい仁義へ命い人皆惜めども。身を殺しく仁をるも者あり。死を怕れ
ぬーて義に仗る者あり。是其死より重ぬ所。已とを汲ざるあり。弘世倘人並に
いつ。今の軍役に従ざらんや。従ふく戰死もとも義の為ゆべ悔るぬ。
いくぶく。と諄返も。言已べくもあらざれば。義成主憐く。ぬらんの是非に及ぬも。
宜ぬ役を課せんぬ。汝い權且稲村の城に在りく。兵粮運送の事を助け勤
むべ。能剛敵と戰ふく。堅を破り鋭を辟かくも善兵粮を運送して自家の
士卒の命を係ぐも。其忠其義に異るとる。昔者唐山漢楚の戰に
蕭荷曹参る。始終蜀に在りくよく兵粮を運送るれば漢の高祖


仁義
八行の徳以
無理の大敵
を待い

七十五戰の功成て四百餘年の大業を開けり。汝が義を思ひ出と諭し
給へば九三四郎ら。あをゝも推辭むことを辭ぞ恩を拜して退けり。俱しる莊
客等共侶ふ躰て稻村の城ふ從ふ竜りけり。その時又那南弥六が弟る。上總の
普善村の莊客阿弥七。又椿村る隊八も。俱ふ軍役ふ從ふて。あふ在
ア。とゆうえらば義成則荒川清澄ふ命まる。那阿弥七い其兄南弥六が
義死の賞として。既ふ諸役を免しる者と且阿弥七が二男增松い南弥六
が養嗣るをもて。我召使んと思へども。年尚十一とろいへいまゞ其義ふ及
ざり。紀又椿村の隊八る。其母親ふ孝ある者と。あをもて。曩ふ南弥六九
三四郎。出來介復五郎等と俱ふ安房ふ住ることを欲りせず。其任俠の交を
孝の為ふ思ひ絶て。請ふて上總へ還りしふ。その軍役ふ駈使て。他が孝心を
奪ふ似さり。その義をもて他等ふ示して。上總へ遊まべしと下知あるしるを。

清澄則阿弥七と隊八を召よせて。館の御仁命箇様々々と件の下知を
ら渡しゝ。身の暇を取まれば阿弥七等い感謝ふ堪ず。則答稟まをう。
御諚有ることまゞ。忝く羨りいへども。初舍兄南弥六が重罪を饒させ玉
ひし。御恩澤の大きを及ふ他が身後ふも大江殿及老の御執成ふ。死栄の
あの花ハ枯しふ縱催促せられずとも。今番の軍役ふ漏ぢ。後々までも人
通ず。恩も義も辨知らぬ。鳥滸の白癡とそいへの。その故ふ御役ふ立べき者ふ
いへども。增松を携て。御陣ふ參りいへふ御諚の重けれがとそ。阿容々々
とゝ。ゆて退らば。必南弥六が霊凴ふ。酷く出りいへ願ふいとの隨使せぬ
へと意衷を盡て涙と共ふ。ゆゝ。其子增松を喚出して。清澄ふ見
せゝかへの去まく。欲せぬ。又隊八も其心操を陳く願ひ稟まをう。御諚ら。阿
弥陀の慈悲本願ふ異ゝ。羨りいへども。初謬て。老館を犯しまつるまく

欲しけ。悖逆の罪免れ難を。饒されて舊里なる。椿村に還り。日毎に恁
倦と告ぐる。母親涙ながらに泣く。其御慈恩を。努る忘れて。身を終るまで
勉畊しく。年貢諸役も。人一倍に身を入れて。仕へまつれと。切に教ゆ。然
今番の軍役に。欽びなきまでに。則親の心に。然るを御免を乞うと。退
らば母を。ひとりぼっちにて。腹を立いかんいかぐ。當役を果さぬ。然らでは親の
心易かるべからず。いかでいかでと。たばかる。額御伏して。立も得去らぬ。甲乙共に誠心の
大々なるを。強難なる。清澄は退く。義成主に。阿弥七隊士八名が陳情の
言の趣を。具に申し上げ。義成主感心浅からぬ。現匹夫も。志を奪ふ
べからぬ。然りとて。他人を勇士の隊に在らせるべ。倘不幸にして。流矢前翼九に
命を殞すもあらん。欽是も亦不便なり。その故に。今他名三名を。烽
火臺の助役に。但し。増松は童年なれども。洲崎木工三が外孫。荒磯

南弥六が後。なるをのて。氏を磯崎と名告らせて。宜く助役の頭人とせ
べし。因て阿弥七と隊八とに。倶に増松の後見して。當津の烽火を。掌るを。
職分おるさしめよ。勿論烽火は。本役の士卒あり。其兵毎に上日を。偽へて。
新舊一致なるべしと。重て下知あり。清澄奉り。四能出て。隨即増松阿
弥七隊八名に。御諚恁々と。渡し。且烽火臺の士卒に下知を。偽へて。件の
三名を遣れば。阿弥七増松隊八名が。欽びいへばいとゝ。その義を漸に。偽へ
ず。三萬五六千の諸軍兵。誰か感悦せざるべき。仁君上に在まれば。畎圃の中
も忠信あり。天の時は地の理に不如。地の理は人の和に。管領烏合十萬の
衆を。ひとく。襲ひ伐まく。欲するとも。臣民一和の我君に。豈勝ことを。なるべけんやと。思
ぶる者多かりけり。間話休題。その日又義成主は。両家老辰相清澄。並に軍
師犬阪毛野。防禦使犬塚信乃。犬山道節。犬川莊介。犬田小文吾。犬飼現

八犬士に告示あるべし。我堂宵外國の制度と恩義約聞戰の得失い揔大將なる者に係らぬことなし。そもそも其君揔大將を擇び任ずる時、必ずづから印刀を授けて賞罰を儘ずること漢の高祖が韓信を舉用ひける時の如し。即是この義あり。その故に其從軍の偏將なる者、諂へ敵の為に敗らるゝことある時い揔大將の罪として、解官せられざるべし。我皇朝も神代より早く這御制度あり。書紀に文を照して知るべし。然ば國賊征討の揔大將に必節刀驛鈴を賜ふべし。賞罰を任じ、ぬ蓋其中葉い忠文朝臣の將門を討ける時より近世義貞朝臣の尊氏直義を討ける時まで朝憲正かくの如し。あるに世の降りて、昨今に至りて舊例廢れて然る制度なし。ヨヽ只其一隊の將なる者諂へ敵に敗られて士卒を喪ふことあるも揔大將の罪とせず。あの故に軍令明らかぬ。賞罰正しからぬれば血氣ありて且名を好む者動もれば先駈

まで。軍法をたゞすべきに力戰を上日として謀畧を好む稀に事に臨て怕れ謀を好む成る者い唐山聖人の用意に豈力戰をのみ勇ありとせんや。ちをのぐ。今我制度い隣國の軍法と同じからぬ。水戰い我揔大將なり。又陸戰い義通をのぐ。揔大將に充れども。水陸共に進退い軍師防御使に大士なるの指揮に従ふべし。大士なる倘失あらば必先我を罪せよ。大士も皆軍功あらば士卒も俱に賞祿を取せん。我い素より人を殺すことを嗜まず。況や那兩管領に怨なし。今るを定正非理の限を名とする狹取我を征せんとす。我已に義を以て備を做すのみ。約莫聞戰の間其當の敵に遇りて殺さるを好とせん。只敵の大將をよく生拘るをのぐ。大功とせん。首を捕るを大功とせず。犯す者い法に処せん。我衆に示すの軍令を早く下知せべし。則毛野信乃道節荘介小文吾現八に名刀各一口を賜

あく。且命きらく。各士卒の軍法に違よ罪ある時は先斬く後に生ロよ。親兵衛と大角に。倶に這大刀一口を賜ふべ。他若を今。當陣に在ざるべ。親兵衛に賜ふを信乃に大角に賜ふを。現八に渡し措ん汝若権且これを藏めて。異日他若に伺へよかし。他若は這里に在らざるべく我若閑に思ざる誠心をのく恁いふと宜くたの立恩を查しねと言深切に示しのべ六犬士若は拜し受て恩命微軀よ餘らあり。倶に犬馬の力を盡しく。仕まつらんとそ禀しける。然ぞ辰相も清澄も及直元貞任も高宗逸友良千友勝是より以下の毎もの。たの命令を兼る者。皆共侶に感佩して畏りをそ禀しける。偖も折ら龍田る。東金萠三小湊目鱆船見六郎若は義実主の使を兼り。主僕倶に武具して。既に當陣に來ふけ法よ。今命令の最中なれば其従兵を退けく。權且幕の陰に居り。言の果るを待らける。

曲亭翁口授編　一陽齋後豊國画

新局玉石童子訓

上帙五巻
下帙五巻　既發市

先達の実説に事ひのよりのかを忘れて来ることはなし

此書は曩に曲亭翁著編近世説美少年録と標題して初編より二編に至る迄發販し亟く世評高く今昔無比の珍書へ因て雲顧看官後輯の發市を俟ども故有て翁稿を脱し賜らず爰に第二輯より下四輯を嗣ぎ次に次に尓るに漸く刊行の時を得て今年稿成る及ぶ中絶既に年を經て最大う後れ[illegible]書名を玉石童子訓と換られて然れば本傳は美少年録の第四輯あり是より不急編を嗣全部の結局に至る支近く在り巻を繙いて題名のことを見聞し事の譯を識ぶる主顧君子に生ロまる前編と[illegible]く高評を賜らん本房の幸甚しからんと

江戸大傳馬町二丁目　文溪堂丁子屋平兵衛謹白